

我が同志、西川純君について

文責 岩田吾郎

西川純君(一九五〇年生、六六年大阪教育大学付属池田高校入学、七〇年京都産業大学入学、現在五八歳)は、一九九七年ボリビア政府によって退国処分され、帰国の際「再逮捕」、起訴(「ハーグ事件」「ダッカ事件」の「逮捕・監禁、殺人未遂罪」)を受け約一〇年間の接見禁止・未決拘留にありました。
二〇〇七年三月、東京地裁は求刑どおりの無期懲役の判決を下しました。しか

し、即不当判決として四月には東京高裁に控訴したが、二〇〇八年一〇月二八日に東京高裁は、一審の無期懲役を支持し控訴を棄却した。

現在も拘留中ですが、接見禁止は解除され、ささやかですが関西の昔の友人等によって面会、差し入れ等々の支援を行っています。

以上の簡潔な事実について理解する為には、「長い物語」が不可欠と思われま

す。
一九六〇年代末、全国で学園闘争が燎原の火のように広がりました。日大・東大闘争が象徴する全国の大学闘争でしたが、全国の高校にもこの闘いは波及しました。大阪は、六〇年安保闘争に参加した「生徒会」のあった「市岡高校」のような先進的な高校に留まらず、多くの公立・私立高校に闘いは広がりました。「生徒会」と言う既存の組織と同時に「全共闘」的組織も生み出されてきました。しかも、新左翼各党派は高校生組織を形成し、又ベ平連の影響も多く、党派ノンセクト・ベ平連―生徒会、そして浪人生(予備校)と言う重層的な幅を持って

展開されました。

○北大阪(北摂)にも波及した戦闘的高校生運動は、大阪府立豊中高校、池田高校、大阪教育大学付属池田高校が中心でした。反戦高協(中核派)、高安闘委(フロント)のメンバーもいたが、主流は黒ヘルメットのノンセクト・ラディカルメンバーだった。

西川君は、付属池田高校在籍の時、黒ヘルメットの活動家として六〇年代末階級闘争に参戦して行きました。ただし、当時は未だ「牧歌的な時代」でもありませんでした。校則の民主化、食堂メニューの改善、生徒会の民主化、大阪府教育委員会五二〇通達(高校生の政治活動の禁止等々)反対と七〇年安保粉砕を掲げて諸集会参加とデモ、そして各高校のバリケードストに邁進していました。六九年×月、付属池田高校のバリケードに向けて一〇数名の黒、白、赤ヘル混合メンバーが、バリケード封鎖中の大阪大学(石橋校舎)に結集し、夜明け前に高校に突入し一棟の校舎をバリケード封鎖し、消火器を集め

臨戦態勢となりました。教職員・生徒が

登校し即排除と思いきや、多くの良心派・中間派の生徒が取り囲み、我々の行動主張の是非の討論が広がり、教職員と対峙しました。これには、バリケードの中の我々はビックリです。一夜にして「英雄」に変わったのです。秀才もいたが、多くはミーハー的な活動家であり、ROCK & FOLKとヘルメットは「もてる」象徴でもあった。このような情況は、映画『69』に描かれています。

○北大阪の運動も含めて、短命でしたが「全大阪高校生共闘会議」結成へと上り詰めました。(当時、共産主義者同盟は主に大阪市内を中心に、社学同高校生委員会・高校生安保闘争委員会(高安闘委)等を通じて、大阪府高校生連絡協議会(府高連)市岡高校・清水谷高校等々)を形成して、後に「高校赤軍」と言われるメンバーも生み出した。

府川充男さんが述べる、東京の高校生運動の高尚さとは落差がありますが、全大阪的な規模はあり、各大学全共闘、各地区反戦運動、そして何よりもベ平連運

動との共闘も当初からありました。

○一月安保決戦の敗北を経て、西川君は京都産業大学に入学し共産主義者同盟関西地方委員会の活動家として登場します。七〇年五月一五日京都円山公園の沖繩闘争―祇園石段下のデモ指揮者として登場していた。関西「戦旗社」に住み込み、北摂地方でも活動していた。当時を知る者は、現在の共産主義者同盟(統一委員会)にも多くいる。瘦身、長髪に赤ヘルメットは似合っていた。他方時代は共産同赤軍派を中心に、武装闘争に突入していった。七〇年三月日航機「よじ号」ハイジャック、七一年五月沖繩闘争集会―鉄パイプ爆弾、七二年二月連合赤軍・あさま山荘銃撃戦、五月VZ―五八リッダ闘争等々……。七〇年代闘争は、三里塚、狭山、沖繩等々と連続するが、他方では連合赤軍銃撃戦の敗北と肅清の暴露によって、「閉塞」して行く戦線もあった。七二年×月、西川君はパレスチナに赴き、「日本赤軍」への参加を選択して行った。

○それ以降の三〇数年の「日本赤軍」――西川君の軌跡は、永年の非公然活動からも不明である。戦線と国境を遠く離れ、我々日本の知人、友人、同志とも「切断」されていった。他方、パレスチナを始め全世界に、新たな知人、友人、同志を得たと思われる。

一九七四年フランス大使館（オランダ・ハーグ）占拠。フランス当局に拘禁中の日本赤軍メンバー三名を奪還。

一九七五年ストックホルムで西川純、戸平和夫、旅券法違反で拘束、強制送還。アメリカ大使館（マレーシア・クアラルンプール）占拠。日本で拘留中の西川純、戸平和夫等五名を奪還。

一九七七年日航機ハイジャック（バンダラップシユ・ダッカ空港）日本に拘留中の奥平純三等六名を奪還。

「新聞」紙上で報道された、西川純君の軌跡は以上である。それ以降八〇年代、九〇年代を通じて、パレスチナを始め世界は大きく変貌していった。

○再び、西川君の名前が「新聞」に登

場する。一九九七年一月二日に、ボリビアのサンタ・クルスにおいて、現地治安当局に身柄拘束され、国外退去処分によって帰国した際、「ダッカ事件」等で再逮捕された。以後一〇年間の接見禁止未決拘留が続いたのです。接見禁止の分厚い壁に阻まれ、昔の知人、友人、同志はこの一〇年間は何も出来なかつた。他方我々は、世界と日本の階級闘争の変

貌の中で、歳月と年齢を重ねて行つた。関西の学生運動、労働運動では「無名」の西川純君ですが、関西が生んだ「革命戦士」である事は間違いありません。